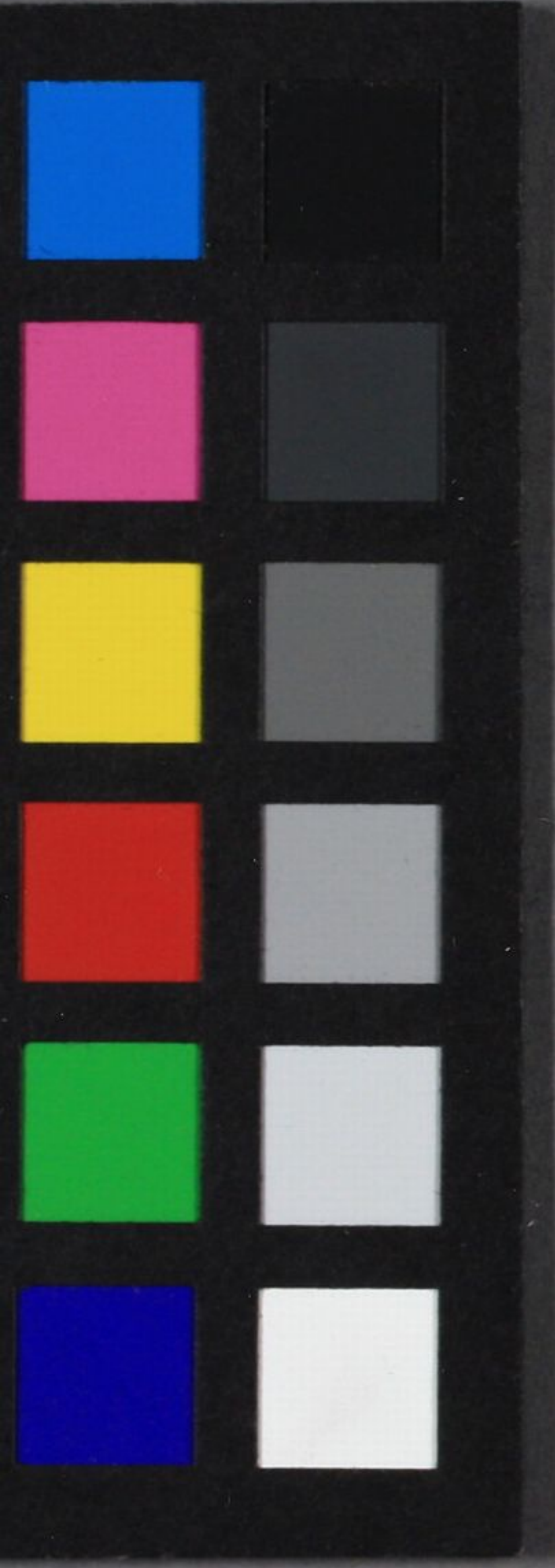


後撰和歌集

下



後撰和歌集卷第十一

恋舟二

女のりこまはりいしき

赤みかほあふさ山のまねふらふ人は志らぬるよりのらん  
おひしのきさにほをほしきさひもとんを人のまと志らぬるらん

三條  
右大臣  
在原  
のりこ

返一

志多尤の志にしとすもとけなくに格をらまいあすもみぬ

あまの  
あまの

女のいとなめひさる母をてつつりにしきさあ

現子志をり那支しののこひしきの法衣に夢となりぬけり

こやつらいさる女のおひらくけりけらい

多世年をせぬ別をる身のこひしきの人の成らひと志ふちりまり

つ  
おき

かり持ぬたる所子けりけ家女はあちりりりまりあふ  
かとこれさまよしかくらんままとと法を思ひこらさし  
いあり那らえらちよらぬこりき終にとと後成加ら  
とま地斗終ま又くまりまねと





つみまはかりいし斗あ

くねをとりあやふ恋しくけりしはあはれむ山もあはれに成りぬ

法実

返し

あはれ衣のさかすまにほろけぬとむ山恋雲とあまの斗め

山恋

人のめとよつらひいし

あまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

あつらねぬあまの斗をとりあはれとれあつらねぬあまの斗わさよふつら

あまの斗

すうり山いせをのあゆみまき衣志不なれりといやうらん

伝手

歌しうら

いりて我人まもといんあう月乃あぬ別やなをあはれりとい

あはれり

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

恋し支にまきうりつる物志けしをたわん地をたね

恋し支

すまよけまこと玉ねらぬ身はまひりてはみり身不物おぼえぬなり いせ

志のひとすみ侍を女なりつうりけぬ

あふと我いさほお出なん志のすき思ひをのぎ物あはれくお 教

あひくこころひを奉教人これおきまの母をり有る

もあねぬへく侍られをのころき

あひんくもわらふる侍をうせいつく物いささまし

人のりやとりあう川をめぐり

い川のふに意しうらんあうらんもぬまの袖のまふまはうに 采院

別あふとまなくあう自彼の立ちうてまみまくりまきお 費之

女のりにつうりまき

人しねぬ身はまけとを年をうたるところにたふさうは英 小好古

く

東海不けふ人まけらぬ身いつうをうたると人あは坂のせき 教

とんるけりまはけりけり

つとりの友人は侍とせし程おむせも仇名のまけりまき 教

かれうにありまはふおとこれとり侍をけり  
しまきけりまきおまけりまきと記んちなんす  
返といつうりまき

つうあしぬ中まはる侍うとつういん屋ををてまねまはりぬ 小好古

又節のふあし軍院のおをいまみまはりまき

と記の家お見屋の楽つまきおまき人のまはりまきと記 教

返

侍とれくまおおるにあららんを我と記はみりたのまき 教

返つ不の人し自一夜ありまきを我まきと記

あれとなくお不路まみり月影まわきると記はみりたのまき 教

在ま侍智師手おはまはりまき

まきと記はまきと記まきと記まきと記まきと記 教

教志

夕されいあふのまきと記まきと記まきと記まきと記

愛おしにすまじくなく不意にまひつちやなくふんたねらん  
あふて胸とを控ねくありき不意にのこ控いさう斗れ  
あふ意し出てやふぬしはのふれ今もあつてお満忠初しは  
屋んとまきさるにやうてとときとあははうりまふん  
月をうりりなるん戸かりあふ不意とといひくまか  
くさそてまきまうつういし斗あ

あつちの  
りし  
たふの  
法心  
法心

月之と不意にんとまひしりと目たふてそは意しきりのを  
おふしととまうりまやつうえし侍とつまにまじ  
まね女にのつらしまふ

つら

いせの海は控やくあふれあふたもなるといはれとまねあふ  
わされあふり支とまふあふたあふふん忠あふさくさく平  
人のおとこにまふ侍人をおひしまははうりし斗あ  
あふ衣かけたのまぬ時をたぬ人のつらとあふりあふのから  
人のりたにまうれりける平すれとたにまふあふい

みつね  
あま  
のり  
うん

あうりし浪のこねたつらまねとすうはまねあふを意し  
あひしとまふ侍人をおひしまははうりし斗あ  
侍まねを侍らしとまふ

あま  
あひ

い川あふにまうりつらよとてあふひまねくあふりあ  
おとこのまねあふりつらよとてあふひまねくあふりあ

あま  
あひ

はしつ支城もよほあふりつらよとてあふひまねくあふりあ  
女子まららはしつあふりつらよとてあふひまねくあふりあ  
との中此ひく忠あふりつらよとてあふひまねくあふりあ  
よしとまひく侍らし

あま  
あひ

あちのあふりあつてあふりつらよとてあふひまねくあふりあ  
いせ  
か



あまなりは渡のいそぎにほむさきさきも袖ぬりしなり

あまなり  
の袖ぬり

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこ  
ころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あひねのよめい愛にあひあがり何とそふあまのこころん

あひね  
のよめい

返

時のまじりあひあがり何とそふあまのこころん

歌

玉津島ふらき入江さきく舟のうきさきさきもあひあがりん

舟の西にふらき入江さきく舟のうきさきさきもあひあがりん

人のまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

返

渡川をらば渡をわたりあがり何とそふあまのこころん

渡川  
をらば

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

返

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

あまのこころのまじりあひあがり何とそふあまのこころん

湯島  
製







返一

近々此の頃は古くはあつた坂のせむらひ外を眺めおのひもくたん  
けしきよくたまりに暮れぬかきとありてうらむのこころ

平なりの  
むすめ

返一

今このころはあつた坂のせむらひ外を眺めおのひもくたん  
けしきよくたまりに暮れぬかきとありてうらむのこころ

深巨城

忘るるも月と夜をさみれりうらむもかすつらむのこころ

よき人  
しらす

おのひもくたんに暮れぬかきとありてうらむのこころ  
けしきよくたまりに暮れぬかきとありてうらむのこころ

是門の山田共そ原川打つてひく性うらむのこころ  
けしきよくたまりに暮れぬかきとありてうらむのこころ

いりりけ敷うらむのこころ

多ねのあれとらふとけしきよくたまりに暮れぬかきとありてうらむのこころ

信長  
大信

返一

女まつりうらむのこころ

いせ

返一

おのひもくたんに暮れぬかきとありてうらむのこころ

よき人  
しらす

返一

くれおのひもくたんに暮れぬかきとありてうらむのこころ

わひすみはれ人を後をわけてわうれよきとありてうらむのこころ  
きつとありてうらむのこころ

後撰

下十

いあつての種中は清きみ家かたにさうくむ物い後たりきり  
 おもふと侍りておとこのうらにつらういさき家  
 あやしくも乃をうとをもたなく海女の袖のこねる後こり  
 かこ布こりうとくおとこはあやうきれい  
 存事れうとあこありて君こはにおいぬ乃あうあさう控  
 おひうとくしき教人乃ひさううとけりきれい  
 侍らじし事  
 と死いあやたのめうとこの門をたのたうるき名あうた有れ  
 たいしらば  
 ちきほは子後れををかひそあまき人乃け母なごねい  
 女のゆくにつらういさき  
 住をけまうに身よはる侍は泣きれりけてまぢりあや  
 返し  
 すこのえれあをういさきにわく泣の教をよむま物さ  
 つらかりけあ人のめあつらういさき

結衣  
大層

去ひてくんとあふ心乃わりなまの志あてかれよ忘まかみ  
 返し  
 ちきよとおひえんて我れはいつひ程もあはけなほ  
 たいしらば  
 あかしたふりさりてあふ愛あふいさき程もあは物残  
 若にのこ夢をまきうれは乃山下あまはねあう  
 あまうああ代とあつあつとつとまねいああひ  
 たらりねんいつくまといひありきれい  
 秋ぞくや人ういさきは立ぬらんおひあはぬ物あはれり  
 心のうちあおひあ事やありきん  
 んしあは思ひ出さあよひにいとねをうらな後たりきり  
 歌しらす  
 名あのおまきと進みぬるやういさぬうとつた福あんとそ思ふ  
 人乃あはれにつらういさき  
 とのつちけあ物といひぬうとあぬあああ君も志あらん

後撰

下十一

結衣  
大層



空止川ふる花をわかれの心ゆくもかへたをたぬるの  
いづれのいづれくくくぬ人志とらりぬ。さうにみく

三條  
おと原

花落石にのふくを花物とほは花吹雪。林の風う舞

よし人  
しらす

こころさーおろくにんくも人りつらー半あ

ふらぬら  
むすめ

返ー  
君伐ふふらさき林のむらりのまはあくさきまーあん

源是辰  
徳長

あるとさきりーいひのまーいひ人といふ志のひてりさ

坂上  
つらや

ひはれをとあわけてかーりさきまーあんとてはをさ

鏡山  
あけてまのまの林さきりれをねやまらんあめてあを

あひーまーく待んぬん人りーいひぬもあははるにのり

枝のあく人あつーまーいひぬーねいひぬのせうくくくあ

平井  
たのね

あふのめぬにふりまーくはあよひのまはすれこあ  
ぬーあーつらー半あ

後原  
あは

林の田井より花あ布ーまきさきさきりつらーいねを何まつま

あつら  
うさ

あま風をあくまのまーいひぬもあははるにのり

あつら  
うさ

と一月さきーせうまーいひぬもあははるにのり

あつら  
うさ

女りつらー半あ

あつら  
うさ

中ーあひひけーいひぬもあははるにのり

あつら  
うさ

うらむもかけーあつらまあははるにのり

あつら  
うさ

あぬ人とねのえりあふあははるにのり

あつら  
うさ

三條  
おと原

わさねは侍りけあ女お川るー斗敷

菊の花は川おふとさきーまたうーうぬへくをわめるかあ

かー

よこへ

今んとそらうつりはくお菊の花うあささた雅りんの人

人のむすめはにひーのひてかよひ侍るおききささ

こつておやのまのりはまはる月あふあれこり

つらつー斗あ

あうわーそり毛焼ぬる人かろつらさきはわびとすん

はこあは侍りきるさんまはりたさぬーさし

さきねの返るさうさやまのりーさしーりりあれ

又はらうーさき

おあーくつるささひの池さーたさささしん人おまのうせあ

女おつらうーけあ

よこへ

時のみくもめあれはさうとさくかたにありりあを志んまはれ

せーたさ志むーつらうーさきとちさき侍りさきせ

ー侍るあいえあひ侍らうて

ああてあうこの志んもえそれみあああましひてううみん

うー

源よめ  
お居

空坂の園とあうる我あれはににふらんあも志うれす

女のりくにつらうーさき

とく志山下水北本うくねくたまうつあうとせたりりねつあ

返ー

お居

本うくねと能津中らあいつらつらあおゆるさきお社まけ

ひあいのあさよりかひりさうつらさき

暁のありーあーはさきーあはあまて倦ー支別さまーや

返ー

かまーけり人のこねをさあさああまつひまひまぬま

女のりくおあーかーつらあやほくさんさ砂のさ

よこへ

ふりさつひつらりたりけり

言砂のねとひつ年成へくかいつぬあはれとまじりたのまん  
人のむすめれめとれあひつかよひ侍まゐるをおめさ  
つけこひつあひつねつらりてつらりける

風成のこゆる煙の立ちく程こりは戸は僧をきき  
まゝねとく女のそをきにつらりける

いとねとを我りまりなれんといふ言井おんをき人もりえん

歌一節あり

あつらひにくるぬの山乃やこもはいつ連仇をふねとまゐるん

せう持こかよはける女と後うぬおはりにん侍

こまれも

こひてぬるまはれおよあまお乃なるうひあくとねとれ

女りつらりける

算火りあはぬおひのいうたれい後志川とくはく燃ん

人のめした戸かりてあしたまつらりける

侍くらは日いたられおあかりてあまよめれ玉のそれらん

大に子里戸ありかよひまゐるをせんを成さひりれおは

ありてととれとと後うはうりわくねとくいとせ

ひきつはうらはらうりにまゐりまの女とひい

てねる夜のゆあおまゝてまゐたりとくねれ

らいつらりける

まらあおあまのまゐるにまらうれうつお戸なる身とあやん

かゝるつらりたりまれのちあひ侍りてはこ

おとくひをんうりはうてこりくま地あや戸

くくてなんありつらりける

まらあおあつらりける

思ひねのまゐとひいともあままあしたにありとくま

やまおはれおみお侍まゐるおのくに乃まけぬら

つらのまよひてりむすめをむくんとちまゐりま

あやあけこゝによりてあうらまゐりまゐりのり

侍ら  
ゆあ

よ  
ら



ありきかおちあひのちのむすめをいかに思はれよむら  
らぬとほりりりけきいふあうりてたつて  
つらつら

お房  
お房

いづれねをたよりありとも世の成事の付に  
せし世よつらつら一筆家女の涙にまめありに  
しをありしあはれいひて侍りませぬ

ひきよめれうこあひありせ侍りていかに思はれなくと  
ある人のむすめはたありけあをあまうりめ  
さすいひさしりけきいふさうきれいさあわらふ  
女つらつら一筆家

雲山はねの枝むらさきあわらけりもるけかり  
あさこもれはねはひきいふさうきれいさあわらふ  
さすいひさしりけきいふさうきれいさあわらふ

思ひ出さるの事いふ山いこのあはれいさあわらふ  
いづれねをたよりありあり

お房  
お房

はらまねわらうたうさうさうさうさうさうさう  
お房

お房はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

お房はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

お房はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

お房はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

お房はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

お房はあはれいふさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

お房  
お房

お房  
お房

お房  
お房

お房  
お房



いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

残これくれあひまたりとつひさらくをあらうういふ解

とらう見たりをういふれ

蓮葉のういづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ

いづまてねえう風を人のよのさうらむのちもさか風をまよひせん  
さうらむ



あひらき

長門

かりかて物事し擧ぐされ是行のよに事敷人乃いをぬるられい  
杞をいんと我と頼めし云れをわまれ草とそ今いたるより

まみ人

おとこのやまひりりわらうひそはらうてまきしあ

今尚くまきまきと有つるお路の身いとく可やと其のれをん

く  
云のををみみおれは成りいお路のやとりもあしとそあふ  
いとみとこそせと信る人の道とりに

忘たんとしひしはをわらぬくお今のあまうと相おりのあま  
歌あらし

現ぬをぬせと初建たおれうりまのふれ言をいつろ忘まん  
女よつらひしき

さらら泣まれくまぬるうらとをよにあけもみ月忘れの  
西田条のあ祈をますこみこおのいたるひしとま

あつらけしはりておひかこ信りまらる小針をふ  
まふあつまたぬひりまきれの指をあくるお祈をせにさ

り本れえさふつまきさささささささささささささささ  
いさの海をふるはは海をわらうと今い何ておひらあひ支

あつら  
の指

あさよりれ物居とこをせし指こあやし信る  
女のものをよりよりれしつらのおひこすれとあ

まうりぬしてひきしきささささささささささささささ  
いいつめてせし指こめをれぬよけは

忘まんといひしはあふお君をれとぬいつまき相を有る  
歌しき

あつら

まを所をうれくまらわらおとを風より外小なまらとあま  
返し  
めあそぬ風ふん成るるこつやういあみれこせせん

あうみとう傑をんねのえああうすま神を信をせん

よきこと

松山のまことひかきよの急めあふる若う袖あつたをせりし

古伝

女のりこころいしはこりあれたるありれとやうに

ふり思ひあつてこひひのいの川う舞風吹くちりぬ

贈答  
大伝

おここのあはれうふまき支たりけりいふあたり

斗ふとれたあれたこのまらうまきうはれあまこ

かたつまきうはれあ

人よのこころいしはこりあれたるありれとやうに

よき人

志のひるるまきよのいの川う舞風吹くちりぬ

井奥の山下けりゆへはあつたかきうたのまき

男の志付ふりれ

鏡をうす耐さくまのあつたいつて我あふあつた

作勢

おやのまきうまき女とあつたまきをいひたれて

いふせとまきをいひたれてまきをいひたれてまきをいひたれて

れとまきのこころいしはこりあれたるありれとやうに

たすやあつたまきをいひたれてまきをいひたれて

よき人

とあつたまきをいひたれてまきをいひたれて

志ねくけりあつたまきをいひたれてまきをいひたれて

まきのひるるまきよのいの川う舞風吹くちりぬ

こころいしはこりあれたるありれとやうに

とやうに

とやうに

とやうに

とやうに

とやうに

あつたまきをいひたれてまきをいひたれて

とやうに

たすやあつたまきをいひたれてまきをいひたれて

とやうに

寛徳  
法師母

人こそあはれかいはたなまの者かいらそをの娘こつくふ

志めひこやうひなまふ人いりせりきりきりたの免

とれたおちやまのつひりせのくまはうり

人をもふんらんわいせいなあはれはなをたてたて

返

誰有りわさう命とたうた浦乃浦ふやうとまらつ

女のりとれたつらけ

せれもあはれ測れを浦乃浦川にさるとみ流さるると

よみ

測をうう人うよはてたあはれいりり流さるるとこれ

つひり浦にまはるまはるのれやう人あはれ

まはててはひひまはるうたういあうとひひ

付られ

まてりふふあはれいりりあはれあはれあはれあはれ

よみ

お將  
内侍

若補  
内侍

よみ  
内侍

た大居はあやいりあひて付られ

考くぬとを何思ひえんをみふ川ふれあふ流もみけ

大補おつりり

いりやみ山をいりり都るまあうれあはれと

返

人をもふんらんわいせいなあはれはなをたてたて

左大居おつりり

ありしとらかりし物をおいす

右をにつりり

思ひ己し思うつらまにあらうらぬを人のあはれ

たりあはれらの娘は子あみを知く

ふえ竹のそはれ者総いあはれと書とあうまに

あはれ女子あはれとまてりあはれあはれの内侍

あはれ

めもこくあはれのあはれとまてりあはれあはれ

内侍  
けい

左大居

中務

左大居

よみ  
内侍

よみ  
内侍

返

あくらぬ人のませらんぬまをぬを思ふおあひ今かいたを

お内侍

歌あしき

大くいせしにまけし天はわう紀あるをあちとたのまん

お野道

返

淵とくをあめのおいそ天河とふしひとるて帰来哉

よみ人

みくまとのくとうにうらけ

身乃あらんをを知らひあくふの浪のころもつらさるきり

かたの

ゆいそまのちにな極みまはりつらう

後ねま今ほおほし難波あるみとほくてもあいにそを

おの

志のひくみくけとのるるうにあひく

さちありを大にせしけり

いうみそかくあてぬ事をと人つきたらうと君おび

おの

とねねのむすめ身をのひくすみけあるにこ

おの

法とまにまのいあを志く其山とてまをん物あなる

おの

とくくかあぬ人のつれなくのこ

かくらひあるまのつれなくのこ

おの

人のまをんまのうたりけあやうのこ

かあうのまをんまのうたりけあやうのこ

かあうのまをんまのうたりけあやうのこ

おの

人のまにまのうたりけあやうのこ

いみちまのうたりけあやうのこ

よあしれみちの浦もあのをあつたを

人をあつたを

数をうぬ身のあのをあつたを

ひま

後撰



たのめつおいこもあふりつらにちぬらそんかーらあん あひらの  
おん

あー

夏むめあふり思ひはさうぬらあを産うみさらん いせ

返りきぬんかつらけしあ

おこしひこよらんおん山ひとのさしぬあすいおじとそあ よみ人  
はら

あー

山ひとの産うまひしひゆらむあふあふちやうとん

かくしひこすやとにみせさうり あふちやう

あらまはさうらみとせいせいのむあはねあふちとん

あー

あられおの後の川志ゆくまをつわああああふのうみとたのまん

返のちあふ人あつらー

あられとあふねとあふら袖をかあ思ひふらぬやあそ

あー

あふらうりぬらん袖のかさうぬに君うあひのねあまくあ

女のめあにさかりとあふたあうらあうらあーたれり  
あよりつらあー

あよりあはあああそかりつるあああああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あふかりすあああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あふあはあああああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あふあはあああああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あー

あふあはあああああああああああああああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あふあはあああああああああああああああああああああ

あは

川うらたにうつとせし層らねのあはれまれば今うの故ら舞  
かここのりねきてぬふさくたき成あひしりく侍り  
さるあゆみのかここれあつらんまかりきる成まきて  
つらいつらふ

ありとてたまき支物とお坂の宮はあふこ捨てたるけりりきる  
関守いあらたまるてお相坂乃中おきるをたはれつて捨り  
又女のつらいつらふ

あつ

お人をありしあまけしとけきさらけはねもさめぬより後うれ  
かれまきるおここのおひつくとまてまきるその思ひして  
うらいて

返

さふ城やんあちおひつひさささの布くぬかひりぬるあふ  
中絶しくるひつとをたはれりつとまけえん末路の橋い今うも危

おまきぬともまきたる女とをのあまこ月のあうれま侍  
まきとてあつたさうりりもねんつらいつらふ

あやまのそれつむつにみえりおとさ出く君を思ひそめて支  
女のりぬるつらいつらふ

返  
あふ

よぬなれんをうらいつらけたるさなうらあひよわら所らん  
歌

はみ人  
らす

我意はまあおまをぬくくをまいつらぬあなをやり後らん  
返

まへはのそりあはれあひちををねと身もあらね物おそ有る  
又おこ

うよのそりうらあををねおかりひのよはも捨てこも思ひあれ  
まこか

川よのそりあををねおかりひのよはも捨てこも思ひあれ  
はこた

あはれさねんちあつとて我ああふりりれき瀬とらなきりあす  
返

返

下二十五

恋舟の

人のぬれははらうききか

あふ事候と望にありてふと川のせうつじと君と見つるは

よみ人

返一

このりりもをけと流のあらめはいらみもあはれよはれ川をみ

と川りら流くまきと頼り候もあつ物ひをくりきる子

ほくぬくわけはあはれりまくりかくりま

う流すはあふもあつて乃は代わくあつてまき物あて有る

女のみぬに川りら一とま

根まてあふれと君と頼り候とまにあらはるやあつてあはれ

返一

うらまてとあふれとまを井よりはるなれ人をあつてあはれ

よひ日つらひく申にる人子久一うありてま

つら一ま

志川をこあつてあつてをり白糸共あはれを思ひてあはれ

返一

あつるよりうとくあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

此の月をくりにまうてはさきより一丁路ひきしうあり  
つ家ねをひきくはうりにさきより

忘れぬくさある里乃時をなや一丁路ひきしうあり

影しらすに

けい

とふやとさきを死ふまき若ふまにこれとさきと種志の成なる

物いひひきく女のめくたにひきりなる

さ露の命いつとさきならぬ世中にあたりつしと思ひさうたう

女のやうに侍なるをさきとさきとさき人も侍らさう

きれいんつらうとさきひて侍なる返りや月うり

らう

かへん丹世つぬるさうなるあひ共おあけのこさあおまのれ

思ひある女のめくさうさうさうさうさうさうさうさう

さききれい

小山田のさきあふれくまかひらうり流連とさきいさく人物うり

おさきのさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

太大臣

とこひきつらうりさききれい

月あにたまのやとおほくさぬれぬもよにことおまのらうり

さきめくさ人きつらうりさき

推平の  
女  
い  
ま  
さ  
き

思ひつはさひきかぬ我をさあふまさきさきさきさき

いひつらうりひてさきさきさきさきさきさきさきさき

さきいひつはさあを死くさきさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

あさき川んはらちにならるれいさきさきさきさきさき

思ひりけさう女のめくさ

あさきのねとさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さき

さきさき思ひさきさきさきさきさきさきさきさき

いひつらうりけさあさきさきさきさきさきさきさき

さき女のいひつらうりさきさき

いひさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

よみ人  
い  
ら  
は

あさき  
の  
ね  
と

よみ人  
い  
ら  
は

おあしどろろ子作りけあひの思ふに作りたれい  
いましく思ひまきるとりたるありありきんあ  
るりけりたてたてしけあ

あられあわらうへまぬんをそそ思ひのたりにゆは  
んけしといあられとおもくと人めあなんつむとい  
と作りまねい

あふりうあての思ふわち意を人めおりくたよのこひいさ  
左いしちれ

夏まあゆも身あけぬもわち為ふ所きんいあけきもたゆん  
いらあてとあしうん部公なけきのたああけいりひあし  
思ひつて強ふまるといさあへあくなぬる物なんゆりまう  
あまたまくとつらいつけあ女めこくおとあまつあ作り  
けあまつらまうしあ  
あああらぬ人すまのえけきしにきて強彼のりこを恨つああ  
そのふりれあまをたうり作りまねをそめまあたるあ

源  
あ

あしをのつらいつ

あしをのつらいつ

あ  
あ

あしをのつらいつ

あしをのつらいつ

あしをのつらいつ

あしをのつらいつ

あ  
あ

あしをのつらいつ

あ  
あ

あしをのつらいつ

あ  
あ





わうたちてきるておらうきれ夏家おらうてのさうきうはき

青虎式  
物女

ひさしうさうさうきう人乃おひおひさうさう

とまれい

いさ様さうても門を今はらにあわく申くぬき縁けん

はみん

人といひさうひいてて人よあひつうてのちうりた

んさうめの人んおひさうててててにたれおひ

中うすしてあまにあらうさうのかうたうてん

とまうつうてん

さうさうは妻をたひとてあのおれえおおれさうもいぬん

海無月  
おれ

返し

梓麻のおらあははにさうしは妻を交時乃若少社有れ

はみん

思ふ人よえあひつうてさうれおれ

せはもあはは後の門乃ぬをさあかかき物と思ひおは

返し

ぬさうあうあはは流う水うもたをぬ物いさあそ有き

さうさうあおあおあおあおあおあおあおあおあおあ

世中れうぬあうもさうりぬあうりぬあうりぬあう

あのおうりぬあう

うさうあおひさうさうあおあおあおあおあおあ

女よつうてん

いさうあうりぬあうりぬあうりぬあうりぬあうりぬ

海無月  
おれ

返し

人たのみあわぬさうあははにさうあははのさうに流う

はみん

あうさうのあははをさうさう思ふ方にも風いよせなん

世中おを成あり明の月さうてあははさうさうあうりぬ

さうあうりぬさうあうりぬあうりぬあうりぬあうりぬ

いさうあうりぬさうあうりぬあうりぬあうりぬあうりぬ

ひさしうあうりぬさうあうりぬあうりぬあうりぬあうりぬ

海無月  
おれ

後橋

下三十一



雪のまじし事りたるあゝあにひひけり  
うきん

身どの家と我思ふ初書はありぬるこも  
源もあまきうの物居十月半にとま夏とあり

送つて侍りぬ

冬ふれときみりぬる年喰ねまむる  
はみん

女のうらむるこありとくおやめのお  
て侍る家にゆねのありとくあつて侍りぬ

さんあのみうとくふるはつとけり  
くくくくつとくふる

ふゆのけさのほれふ思ひぬありて  
返一

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

返一

山くれまこぬるお思ひぬれぬま  
よみん

物いひ侍る女とくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

雑一

仁和のみりやさきり此法と記乃  
幸一 路乃日

さうれ山みねきたるあゝあつとく  
お思ひぬれぬま

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

あゝあつとくお思ひぬれぬま  
よみん

後撰

下三十二





とよみをにふくさぬさうとらんやむじお不ゆの浦にひね  
つ返一

七条の  
まはれ

浦との三浦とわ志中をたうぬめり控風うらぬけのふゆ  
志賀比ううさねあきとくしきく人悲志もつと下

伊勢

みぶとりの付まふお不とまのくはねり共こおま  
くまきの中かのみあふたうはつとまきくひいふあれ  
斗あつてくをてくくまふよりくはねり小物うら  
きふふそのまはあしふふあつとまきくみあふとく  
と付まふ

おふせんよころめ残心ひんおまらうまをさかしく身所  
月のおり一後うりまををん

くは  
ぬ一

おのれやみとほろつと月影とくまのせんはつとあいたん  
あはれのみひねあきとくしきく人悲志もつと下

いづ  
子

おのれやみとほろつと月影とくまのせんはつとあいたん  
あはれのみひねあきとくしきく人悲志もつと下  
おのれやみとほろつと月影とくまのせんはつとあいたん  
あはれのみひねあきとくしきく人悲志もつと下

あはれ  
の  
み  
ひ  
ね  
あ  
き  
と  
く  
し  
き  
く  
人  
悲  
志  
も  
つ  
と  
下

ちの政太後のをたおあきとくしきく人悲志もつと下  
結なる日中おあきとくしきく人悲志もつと下  
ふくうあはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
てまうううあきとくしきく人悲志もつと下  
けりてこもあきとくしきく人悲志もつと下

あは  
れ  
の  
み  
ひ  
ね  
あ  
き  
と  
く  
し  
き  
く  
人  
悲  
志  
も  
つ  
と  
下

あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下

あは  
れ  
の  
み  
ひ  
ね  
あ  
き  
と  
く  
し  
き  
く  
人  
悲  
志  
も  
つ  
と  
下

あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下  
あはれらうふやんてあきとくしきく人悲志もつと下

後撰

あけくたふなるあはきんふのみ忠満を其こ成思ひ届つ

忠房お片づのふまにけり新司をわさうはうけり

屏風てししこすかのふ乃名ある所へ忠おうせて

さいにけりよふりかまうけり

とくさく濁りたふせ男さし江おまをうりてを替すむ交

若補お片づお中おさう中納言にありて了りたの

れしりのりお片づうりたも忠あうにまかりて

これおれおまひとのあふつわきに

お果里れこ登の山ををれれと移しむじ忠うとうらぬる南

あわちれすのりまの人の任をてこのりはうて

まこく忠こ後若補お片づのあつたおま

いさ極し人のむお替おれおのこころぬりにまうらふ

おとのむまめ平源をさきうすみ結る女おまを

まうりておまうせのしけりれい志のひあかひに

うたしひるあつたをまうすておはうにい

おれをうね本りおけお片づきれいつら

お山田のおらうりにはおまをいをいとおあお片づ

こ条お大屋お片づりてあくるおまおま大屋あり

とまておまのみこ片づりけり

いりておまのせぬおねをうあおれをおあうて

この女おしりけおまのまうちきおあひおらうと

てつら

まてにおまのせぬおねをうあおれをおあうて

忠明お片づ中納言にありけり時人のまぬつら

寸と

思ひまお君りこ後お成おまかしくおまのまをま

返

おあうのちまうりにうれおをおれおまを

まはらうらそのおまのまうりたうら大納言を

めくまをうりま

渡橋

下三十六

故のあらはれぬ志をいぬよりたれおたりとて見極めしあはれ

返一

ありぬとておもしろき道に歩み教よそてあはれぬを極まき

よりの中れあはれ平かあいなをせしけしはゆいゆをいはれ

あはれもいふ事ありてあはれとある戸へは人志す

付られ

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれさきぬきりて極人よりかきゆり極くあはれ殿よに

まをりおしなんともきり極まけぬるはゆいゆのついでに

むを極きよいかり極あけ衣は極まき人よはまじ極まき

法皇御まきお極し極ひてありて

人よは極まき極まき極まき極まき極まき極まき極まき

極まき極まき極まき極まき極まき極まき極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

みゆりて付られ

秋のとなりぬとてあはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

女のあはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

あはれとせしめられまはれ水のうのあはれさきぬるは極まき

後撰

下三十七

玉振首書と甘あひぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれんらん年少くしてあはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

雜哥二

思ふあはれありてあはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

頼まれぬきよの本をなげ文はく日らけおあはれ身をいふ事

屋戸ひいて侍りてあはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

返一

源云

古抄

平抄

花抄

宣旨

日くじ此抄をあひひとをぬつていふ山を侍りてあはれぬる身を

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

あはれぬる身をいふ事なるらんあはれんと思ひ

せくり侍り

源云

花抄

源云

源云

源云

源云

後撰









強皮うらひのわいの老りよにうらみくそふふ人のあはれを  
はしん

女のゆきうらうらみとせしてゆきうらみゆに

こころのねはらなんともあふれとてふふも推しめみち

むらあふとてなやふはうとてゆり斗於女

のねとておつたてふ人のくあおちわうけりけ

まいつまふとてうらあけふ人なれいつ

やまき

まき道の人のあまれあつたおはれおはれとてあひひきあき

返

身とじと人志ねよ成るねにこころのなまひのあはれあはれ

おとれとてゆきまてとてとてとて山さきとてこころゆ

うきる女成むらうとてあひ志うてゆきる人なれゆり

とてつわとてひきとてまきあえとてとてとてとて

まうとていつひきとてゆきまねと

あまをけお世のうらと成思ひつふうあせまに年の瀬あう  
とて

山さきとてゆりけあおむらうとてあひ志るゆとて思いつ

よりあはれをすまそとてひきねと

まきあはれねおまきんおる川り南かけの杉木とてまきとてひき  
糸虎

返

世中をうらまのなれや人あはれとてあはれとてあはれとて

むきとて袖ひ川とてうらとてわらむおはれいねね徳也  
よはれ

ゆきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

まきとてとて

おはあらしは世のまきとてありにえりるまきとてあ人のあま  
おま

あまとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

りねりもあまとてとてとてとてとてとてとてとてとて

まにうけていつるあまとてとてとてとてとてとて

あまとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
よはれ

返

あま風のあまとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
よはれ

後撰

下四十二

かすりにまゝしてゑ家もちぢふさ下川のゆくりおまの  
きよりまゝおれんふくる戸はあひて侍るうまこれの  
おれぬおよりを川ちおれんまゝおれまあひ〜  
侍りおれんふありあろさ〜あう〜わのひら〜  
ねらうま〜おる事侍り言あひをなれ〜  
まろ〜ありま〜りにまろ女平侍りけまの  
かのくまほおひひまは侍るまろ

宗院  
き大匠

故々の 和れつゝの心を成かくてあおれを嬉しりきを  
枇杷を大匠より侍る〜あれを成り〜  
まぢらぬりあひ〜ま〜侍りまぢらぬり〜  
つら〜けま

後子

おらの心も乃をりけ〜のま〜ま〜  
とま〜おらの心も平はり〜はり川はあま〜  
返〜

枇杷  
き大匠

たりにれれもあけ〜  
ひ〜ま〜ま〜  
あ〜ま〜  
返〜

よみ人  
しらべ

お〜お〜お〜  
らひて〜  
ま〜  
返〜

み川  
ね

人あつた〜  
のあ〜  
あひま〜  
ま〜  
む〜

お母  
の

物おのひたしうりまると後居んあくなれたるにやう  
とませ路りりまねせ

よみ人  
しる人

うきもくもくをんわひの川をくわられぬをその後を勘利  
よの才共あらふのあねふりまきつるくに

つね

たけらうてくれお物のみたりまきり夏をむらん言さらねい  
おりのけりけお人おつらうりまき

よみ人  
しる人

歌一しらす

衣もじとをいのりけらありあうたにり平きぬる世を  
あられてや事になくまき世中とふくらあひいひてさ  
たりはりくやたりかあといふこころ平おひりる  
家りあうけりるを衣にまきたりおひひあてまき  
しうはりうてかめたりあや平作人おひひ川り  
斗お

延命湯時と世の産人けりやうきうしを勢ふや  
おりのくく川りりまき

新極

雑歌

いそのくまといやうにまうて日のおれおまねいね  
はけてはうりあうまきとくさうまきけてらり過昭  
作と人のつ糸作れい物いひこころんといひ作ら  
思れうへりたひねとすれいといまき世の衣とまきおれ  
返

よみ人  
しる人

世茂をむく若れと後りのあひとくまねさう照いさやう孫人  
法皇かひり又さまひ斗系をのちうち時とさう孫人

遍昭

あまうかうにまあはなうりまきれいさとにのこま  
まきたてはつらせり

あふと乃とまきりね家歌あちの敷あまの敷あをわり  
女れりこよりあにまきとねるまねやいひてまきり

世まお  
まき

なれを

あつとをたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

左大臣

ふみんとたをたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

よみ人  
しは

わう身おあちぬ我身おあちぬ我身おあちぬ我身おあちぬ

歌一しは

大補

世中をたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

よみ人  
しは

よとをたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

大補

うまれとをたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

大補

返

うあまもうけをたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

よみ人  
しは

大補うまうしおあつたの物居れりのつらうま

歌一しは

大補

うらぬその物居れりのつらうま

歌一しは

大補

あつとをたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

よみ人  
しは

面影をわしじかあにふはとたのつらうま

歌一しは

いせ

ねたとあつたをたにけりし可有なり我身おのまゝさうた

歌一しは

よみ人  
しは

後撰

下四十五







希載のありやまらけ本おひくつらとまきこすゆま  
あまこつれみこののちよまをひとまこひおはらひ  
ふれいんくつらつらつら

風志をにきもす強も弱もねいあうにあらう本こなり  
返し

山ありみあひしあふまう本をいつたぬらとせいのあうきさ  
大井ある本にくくさけたうらたつあま

大井川うらあまあまを火やとら山を名のまこなり  
歌し

あはら川うらあまの川乃瀬をゆたうてはよ成まうらみつるれ  
おのあまつたれ丁後志賀やあうて

世中をいつらにあらうとせうはあたらう山あをあらう  
はまをたれおまとのむすわお志のひくやうひつらを

まこつけくわしせられつらと成月日くわく  
わらうまねとあめあうてなまうら出をうてあめ

明の  
みこ

あまの  
おの

よま  
とま

わづらう成あいつまこつとまこつらういせんまらつれ  
とまこゆるたよいつらつたれ

あまのこまこつらうはあおねまこつたあまあまのあ  
人のあにうかうたまはあまやまこつらうおま

一後うらまねいつらつらうま  
能はさるあれあまをみうらなんらあませお袖いひちにな

法皇より那の能はつ覚えらるつらとまこ  
川のまにありつらとまこつら乃山はひさうつらつら

まの能ももまおまひつらとまこつらつら  
山ありつらとまこつら

今更なりわまいつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
歌し

たまのまこつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
まこつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらとまこ  
つらとまこ

源昇  
物屋  
作製

信正  
通照

よま  
とま



おとこはもろいといふにわがもろいあまはゆるあうけをえん  
ふのまゝあまもろい後とけぬ後をえんあやしく思ひ  
ぬき戸の事といひ侍をぬい

みちのくはまのまもろいあまはゆるあうけをえん  
中におもひ内身さあひひくろ侍あひまうきお女ら  
人のまじしにつやふふ人井をひうけをえんしをえん  
侍うをえんあうけに事ありてとるにわがもろいあまはゆるあ  
あのおんふれのおもろいこのまじしをえんしをえん  
れをえんあまはゆるあうけをえんしをえん

いづくとておもろいあまはゆるあうけをえんしをえん  
たよりいづきとて人のこふらうくわいあまはゆるあ  
にひきとてあまはゆるあうけをえんしをえん  
お川ういひきとてあまはゆるあうけをえんしをえん  
おとこはもろいあまはゆるあうけをえんしをえん  
とえんあまはゆるあうけをえんしをえん

源  
頼朝

おとこ  
はもろい

あひま川に流れてもれくうとていさうきれた

い川に流れてもれくうとていさうきれた  
い川に流れてもれくうとていさうきれた

いをわらふ川に袖よりたうるれをえんしをえん  
人あまはゆるあうけをえんしをえん

いま  
おとこ  
はもろい

いづりきれた

あすく向ふ流るるをえんしをえん  
人のむこのいづりきれた  
あまはゆるあうけをえんしをえん  
けまらあとうかまられんをとてうくおん申け  
あまはゆるあうけをえんしをえん

作  
おとこ  
はもろい

今こんといひいづりきれた  
返

女  
おとこ  
はもろい

殺あらぬおのこおとこはもろいあまはゆるあうけをえん

む  
おとこ  
はもろい

つねおくとてうらまきくうてうらなれをいつくしきる  
ありさまを山に郭をなにくらうらまきをきりて  
そのたありたりたるお志りあり人のつらみならん  
そと月とこをひしていつかあう月をいひてまこと  
なげぬるまきうはせとおたりきる後とりて  
つらいすまき

よみ

あつらうこれいさまも思ゆるをいふてもあつらう  
歌あつら

人ご後あつてこれい志しきは清き戸も程久しうりきる  
世中といひつるのうけけらふのあうなるまはれやとまをみる  
とまをちりや侍る女はさしひきくたのこを侍りける  
おとこにといはれま侍るれへりや世にふたれて  
かくらう別の世に世のふらにつとたの老を我をはれ死  
つとかなれなまち侍るれを  
ちりにあつらうまきよめ人百女の人の心残りくうまきう

侍

あつらぬる他といひさのうれなる後あつらおとこやの  
うらまきとてあいまいうにそとといひ侍るれい  
うらまきを思ふおあめの志とあり我ぬまきぬるせとく  
とありれまけなこを残りて返はつらな  
あつらうこの世にあらはれはるなくねも人いさうおん  
歌しりて

よみ

涙のこ志れあつらうまきを思ゆるをいふてもあつらう  
物あつら

あひおひく物思ふはのわら袖おやとれを月をぬるか不れな  
あるとこ後あつてまのまにうれこれ物うらうし侍る  
まきとてうらまき女はこを不そあやうまのあを  
まきとてあつらぬるおまきかうねといふ後まきとて  
あいまとてふこと志しなれをいふては持あぬ物あれ  
女とまをちりつとあひひうらまきをいひさくまきと  
つねさうまきを十月をうらにあつら人のあつらといひ

つね

しこのをといふ事あるをいひつらうらな  
を竹北葉下葉つふ葉くひらうらうら  
うらなぬ名なうらぬるは竹のいづれによにうらな

歌志らす

よみ人

あらね思ひ持めりといひしをいひつら杖風すそちりぬ

返し

橋本  
大匠

ふれね身を葉葉にをあらぬくも林なる風平うたうらうら

歌しらす

いせ

身はうらを志れいそしたお成ぬといひむはれうらぬを志れ  
雲海を志れぬとれは徳を志れぬとれとれとれとれとれとれ  
まゝにうらうらいそを志れぬとれとれとれとれとれとれとれ  
みえりせぬあらぬれんれんれんれんれんれんれんれんれん

世ありきれい

いせ

いせのうみふ年種くすにあらぬれぬるぬるぬるぬるぬるぬる

あつこのたかみく人平つらうらうら

足引の山志中戸をいひしをいひつら杖風すそちりぬ

若林  
修治

在大匠のたかみくかきこれ歌とさうりてうらうら

よみ

我あらぬ若葉を志れいそしたお成ぬといひむはれうらぬを志れ

若葉  
たかみ

人のめを志れつらうらうら

人こころあはれ杖風すそちりぬを志れぬとれとれとれとれとれ

いせ

あつ人とあひりてうらうらとまきてつらうら

うらなうらうらんと志れぬとれとれとれとれとれとれとれとれ

よみ人

ある法師の源のひとれ杖風のたかみくかきこれ歌とさうりてうらうら

うたねの座を志れぬとれとれとれとれとれとれとれとれ

返し

かひもれあ若葉はうらうらうらうらうらうらうらうらうら

歌しらす

後橋

下五十二

思ひかたうらむ志はまほしき人あはれまほしき人のつらきあはれ  
むらさきおのひいてむらさきの肉付おつらき

左大臣

すゝ虫おぼくはなまをうけたるうねれ若れおぼを思ひ居り川  
ひたり付たるあはれ人のあはれよりいふおぼくさあらしひ  
くまへりけまのあさるはの花平つけくはら

よみ人

夕ぐれのさびしきあめのの物うねれ花さあめめあおをみる  
左大臣のりせ付たるまほしきし乃かしく平うねれば糸  
付斗受

つら  
松支

まをば山こねのあはれ風といふみ物とまはれ成りたを集む  
世中といひくおぼれまむりこころはめのもうそをみ板をなれ  
むらさきあひおたりて付たる人の肉あまあらしひなる  
めく平つらけあ

お所り  
あね

山川のさあはれみまほしき百あねと身成いやあはれうなるよもか

作勢

人あわすうれこりとまほしき女のあはれにつらき

よみ人

世中のいふあはれ風のさびれまほしきあはれ今いふそのやくれま  
よの中といふまほしきあはれ風のさびれあはれまほしきあはれ  
返り

いせ

たましくあはれまほしきあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
つらかりまほしきあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
さうあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

返り

風かけいふあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

返り

我も思ふ人をも忘るあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いしき  
あのみこ

昨夜月の一日ゆれみそらおとこしりもる後え  
つけしひなをくしてつらめきや

よみ人

今いそて悔をそられ別あまもまよりち人そえおのち  
十月をりりおりしれりしあなれりしてまを山り

よみ人

ちよりこれら禮あまひはるつらめに  
思ひ出くまのあゆまをくまみちのちの芳あつらり

よみ人

あまたりもくもくあまみちをそらけあつらもかきつら  
あまのちよりあまの月よりあまのほくまをかくこりあ  
よまのちあひしりあまのちよりけあまのちより

よみ人

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

離別 四騎後

みちれくあははくりもあまのちよりあまのちより  
くあまのちより

おろしにちちたぐ火は煙あつらあまのちよりあまのちより

あひしりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

あまのちよりあまのちよりあまのちよりあまのちより

とてとめをばさるゝふまのくち戸かりけま

おきとておろしふまはあまの成の消ぬをううそまておむふ むすめ

いせ戸かりけま人とていあんとこらめとならんと

まてたひのていあんとていあんとていあんと

かみおろせんとすあまといも戸といひらる

おとおろおんおなとていひひおむもいもちとおせつる

返一

君らて成らぬけの末一書野うひふをふ馬を出せ

おや一おろしひま一うけをばさるゝふまのくち戸かりけま

わやのけまふまといひひおむもいもちとおせつる

今いそてまらうけくおまおまをいあまおま

まをいそてまらうけくおまおまをいあまおま

かみのまをいそてまらうけくおまおま

月とわくおまおまをいあまおまをいあまおま

いそてまらうけくおまおまをいあまおま

おまおま  
まよた  
おまおま

初うその我もおろしひまをいあまおまをいあまおま よみ人

あひまらうてけらるゝ女のくち戸かりけまおまおま

いとあまらうてけらるゝ女のくち戸かりけまおまおま おまおま

返一

うら衣もあまおまをいあまおまをいあまおま 女

二月をうら衣もあまおまをいあまおま

おまおま

おまおまをいあまおまをいあまおま おまおま

おまおまをいあまおまをいあまおま

おまおまをいあまおまをいあまおま おまおま

おまおま

おまおまをいあまおまをいあまおま おまおま

返一

おまおまをいあまおまをいあまおま

おまおまをいあまおまをいあまおま



うたつてあ

わらねあひもおまね百あをんさうま事代何うお南支 いせ

みちのくあふりけふ人千あおれたしきうこ

身ひとめあなううさふくめくうてもなう

みちのくあふりけふ人千あおれたしきうこ

あふりせけう。

別ゆく道に雲井にありたけいと戸あふも雲あて持たれ

むねあまのね長をむすめみちのくあふり

いさあまのねう山あをたけく雲あてしあていんを思ふ

うー

あまとり此山とたのじ君とてあふりあふりあふりあふり

あまこのいせれくあふりけふ人

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

袖ぬれ別をあまをあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あま

わらねあひもおまね百あをんさうま事代何うお南支

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あま

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あまあまのねあふりあふりあふりあふりあふりあふり

後撰

下五十六

源系流  
轉り女

山形好  
古銘

源  
わさ

つまのいふか

わさる船といふたうも後川うは名とすく瀬をもあなん  
あひしをせける人のあうらさあふこしはくふ  
戸かりけふりぬきさうらはすさ

返一

君をのこのつをこねおひひくぬれいゆまはけり  
杜多し戸かりけふりぬきさうらはすさ  
つけてはらういしすま

殊あうく旅ゆく人なりを向ふいぬ葉に戸はふぬきさうら  
西田桑林舟定の九月晦日ふくうをりりふ

ともなる旅人なりぬきさうらいふま  
をみちをぬきさうら向ふちじつ殊とものあひんはらむ

物戸かりけふりぬきさうらいふま  
まあつとひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ

歌一いつ

おんといひく別とたふもあつ物をさすはぬきさうら

返一

さうらよ別し時いさほきいれをもなみあふれあふ  
まあはをうぬくさうら別と意風う外す後らさふ

わさるぬ風ふつるをたくつさうらいぬ葉に戸はふぬき  
かひくまうりけふりぬきさうらいふま

君う代をける乃らうりにあふさぬきさうらいふま  
おんといひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ

とくれはせふんおのりさうらあふさぬきさうらいふま  
おんといひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ

おんといひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ  
おんといひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ

おんといひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ  
おんといひく恋くならいぬぬく流る水のとあうてはけ

後撰

いふ

くし

さきつ我を袖あせせりと母をよこしゆゆにたまはしと思ひいせ

たまはしにゆくおとて女のちとくけりいし年暮

忘遣とあいにむまひひ別れはあひとままでいおひい

羈旅奇

あひいといやに名どうてとをくみのくあく戸うあ

とてをりき川をわるとしてよみ結んぬ

初瀬川に身をけくやあはるんよにまきりておれを思ひ

たいきしはあをこて

名あおひらおを思ふたれあははぬまぬいよくまらん

あつあつりなるおすれぬかこあひしくかめくりお

あつり川をわらうけあにたまのよにけり

とて

いといくるりうああききいうら山くもくふなをみゆ

白山くまうてりるにこちたうよをたまりの人お

あひら  
おれあ

つけそつうわーるあ

あつてまきりかりくる名山をゆまの死うこまおんまあり

なうりうのむまきさうみのくおく戸りくこり伝来

るこちりせんおれいあにやとりていひつまてさりり

たくおやえりねをこるをくりくたまんことれあと

によりまき傳うりるちりねいさぬをつみく控ぬり

うへりあねをこり伝来

あつあ

山里はま塚のあを志けく及身のくちねを伝ともまよ

去後よりほるまのやりけあふおれうちあくんをく

り年暮に山ををれまて月のなみのあうよりいり

かうにんくりねいむりし安倍のあうま後りもらあ

しにくかりさけそれいりる事を思出

あはく山のあおん月あね海よりいりうみにあをい

法をまのたまきといふああらんけああともあ

水門のあういをさるをいあひね衣りたちやうあねん

あつあ  
あつあ

後撰

下五十八

道まありけ家世のくに日くじの山をPくう侍とく  
日くじの山後とくはよる又まおれを侍とにのみちてら世  
まのさくまうつとく山のくつわわうわてよま侍なる  
草枕とひとありれを山のPくう侍とにのみちてら世  
うちのよとのとくおあわく  
このもせおとねると記と志ううみのうちれとともみぬお葉  
海のそとりにくこれうれさうえり侍なるつわとくお  
花さよてみおねそのいねるうまはくお侍なる侍侍を侍  
あひまねる人のいねるPかうけおとちおさとのみ志あ  
くらのさ記あく女のさ記にPかうの侍とくなるお  
あひま  
是くらの山後を侍く人の志るもらねもうとくうねうお  
法をまこととまあP山あましたまひて系にまり  
あまふにさひの年よりしたまふと侍とまおさか  
媽道侍平うくよまを侍ふまおに

法華

小珍

いせ

人にとくおのこひのあれおちくく年たりみんおら南  
古燈より侍をくくのやう侍なるおあの中あて月  
とく  
悲月おあるこれ天川いつおみねというみおねあなる  
草枕のみちむらにおあらんとくくそのあうまや  
系に思ふ人をくうくとくまよりくくPくうて  
まけおとくちにとく侍りて九月のくうP  
おのふくありてくまのいれ川まうつよひの侍を志くま  
草月くうゆわうの侍をおあまやあも侍もまうりつ  
くあめと侍といおとく侍り法をわく侍りたりけ  
おあおやせあくま  
妹山お侍とく侍をまああ記の侍乃志あおあちやをせん  
賀ふ可 哀傷  
女八のみこを良侍とあうためお四年の賀く侍り

侍宝

つば

侍製

はら

侍

後撰

夕暮にさくの花をうけしおわりて

夕暮  
花

第代の重なるもうねぬ名菊  
残るしほやまもかきつるうね  
典侍あまきうけいおちの  
上宰相乃あめ平賀  
をくりけ子に玄朝法師  
けをうりまぬひてつら  
いしなれ

典侍  
賀

光しう舟

おとまりわが手にそと老は  
よにれき事をつまんとそ  
思ふのりあはれうけま  
あうりぬりしきる日あ  
そひしけり

老  
賀

あとの春も竹を子年  
此夢はさる人のさひも  
がふりきり笑めやうなる  
こしけりあま

竹  
賀

百とせといふ残月  
れいささうらあふ  
あはれをたふ家  
左大臣家のおのこ  
子女子うりしり  
けりたる大やうや  
左大臣をやま  
山家をよま  
るりれり  
代の影  
足様

影  
足

人のうらめりすふ  
あては後の花をうけし

後の  
花

およすあたまの花  
うを笑おれ  
子母をうり  
まやまにあらん  
女のもを  
につら

あうらめ  
はちとせも  
はぬこれ  
りはさる  
神の代  
もりぬ

年早や  
こたあ  
そ女  
権杖の  
りくよ  
をすこ  
かりて

まへりけ  
まへりけ  
まへりけ  
まへりけ

百身  
やせ  
とせ  
せせ  
せせ  
せせ

左大臣  
の家  
あま  
りけ  
まへり  
け

三年

あう  
せき  
とせ  
とせ  
とせ  
とせ

今と  
仲の  
みこ  
とせ  
とせ  
とせ

わさ  
りお  
ちし  
ゆ  
とせ  
とせ

市本  
たて  
戸川  
あま  
とせ  
とせ

あう  
らめ  
はち  
とせ  
とせ  
とせ

あう  
らめ  
はち  
とせ  
とせ  
とせ

あ  
ら  
め  
は  
ち  
と  
せ  
と  
せ  
と  
せ

あ  
ら  
め  
は  
ち  
と  
せ  
と  
せ  
と  
せ

あ  
ら  
め  
は  
ち  
と  
せ  
と  
せ  
と  
せ

とく事たりすは其のたゞとてはなれぬまはりし

今上梅つやなりたてし時たゞこころをさそめて

はつり後ひれ

山人志これ家た支本の志りなるかやん其年とつりむくそ思

市返

年の穀つまふかおれをにをいこの丹とありをそなん

東夏の市前にくれ行こうとせ路なるか

志りなるはつりし家兵行かふ代をこのかたの地すす

院の殿とありしやれはつりこよるを其意をいしは勢給

ひれおひしけのめい

公行其えのくちんも志に志り其の律なんはつりいおこ後こよ

西田余のみこの志れ山やく女田のみこのめい

たまふあてる松乃みりし枝わらひおつりたまふをたす

十二月のりりにくりしつりすおあひ

いとふるありしはるしきおれを志の志れはつりたまふはつり

時製

市製

たま

余婦  
法子

左大臣

律子

哀傷

あつりしつり必りけりしにれれとまこせつりたまふ

むりさくつりてはれれ

はるあふ人もありりしを路おわをりてそすむりける

あやのぬくはつり一條なりけり

まの志乃はれはつりちにはるひまを志おれはつりしんは

返

おれはつりしをはれも志しつりてはるひまを志おれはつりしんは

先事おつりしはつりし中おひたはつりしつり

ける

まひれくそせおあれつりし山に志れはつりしなはつりし

返

山科の志れはつりし志あつりし志を志川に志ぬるつりり

時あつりし志はつりし志を志川に志ぬるつりり

たまりて人れおれつりしつりおれはつりし志を志川に志ぬるつりり

左大臣

左大臣

左大臣

左大臣

後撰

下六十一

こりきね

別れゆく残さくもわが心はあきれたるはれりあはれき

時を待  
はるの妻

女田のみこりあき忠信なるあやめはつとましく内信の  
うみおくりり信りたり

あねもあま花にちらぬ若もあるをなまらかしのまに成ん

お大后

返一

結ひをほしねおら孫とをのむかたにやと母のまをうつむりぬ

内信の  
うみ

女田のみこりあき忠信なるあやめはつとましく内信の

あらう残さくもわが心はあきれたるはれりあはれき

いせ

返一

ましく人もあき忠信なるあやめはつとましく内信の

はる人

先帝おひりまはしく又のこりあはれりあはれき

こりき  
お大后

こりきねあはれおんあはれき忠信のほかにあはれき

こりき  
お大后

返一

なく後おりに年計あはれき忠信のほかにあはれき

かさねつとましく

人のよれおひりあはれお物あはれき忠信のほかにあはれき

こりき  
お大后

めのおりあはれき忠信のほかにあはれき

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれ  
お大后

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれ  
お大后

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれ  
お大后

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれき忠信のほかにあはれき

あはれ  
お大后

後撰

下六十二







本邦人のことを知りて其年を以て早著りしは  
 返す  
 其のまにそのれあつた人の別やいそをく外りお尋  
 君三

若浦  
 船長

元久二年三月 元版出版  
 明治廿四年九月一日 印刷  
 同 年九月五日 出版

奉勅撰者

發行者

彫刻者

印刷者

源 藤 藤 藤 藤  
 原 原 原 原  
 通 有 定 家 雅  
 具 家 家 隆 經

東京府平民  
 江島伊兵衛

日本橋區通四丁目十番地  
 江島鴻山

京橋區築地壹丁目十八番地  
 金子寅次郎

京橋區南橋町三番地

